

第一話 鯉のはなし

「鯉」

● 淡水魚で、川や池や沼などに棲んでいます。

四本のひげが特徴的です。食用あるいは観賞用のさかなとしても、親しまれています。

● 何匹かで固まっている

ことが多く、いつも水の深いところに潜んでいます。



このはなしを
読むにあたって

鯉だっ、受けた恩は忘れません。

なのに、最近では、にんげんの方がしばしば恩を忘れて、ひどいおこないに手をそめています。かなしいことです。

鯉の恩返し

幼い子どもは、けっして理屈で「親」というものを理解しているわけではありません。

ある人がじぶんをかわいがり、やさしくしてくれることによって、その人をじぶんの親だと思い、馴れ親しんでいくのです。

また、馬や牛などの家畜についても、同じようなことが言えます。

馬や牛は、おそらくは「飼い主」というものを、頭で理解しているわけではないでしょう。

ただ、相手が、じぶんをいつくしんでくれていることを感じとって、少しづつ心を開いていくのです。

心あるにんげんどうしならば、なおさらでしょう。

さらに、けものばかりでなく、鳥やさかなや虫のたぐいでも、恩を知る例がたくさんあります。

たとえば、漢（むかし中国にあった国の名前）の武帝にまつわるおはなしです。

ある日、武帝が昆明池（武帝が長安という町につくらせた大きな池）に出かけたときのこと。

武帝は、その池で一匹の鯉を見つけました。

鯉は釣り針を飲みこんでしまっており、いまにも死にそうなくらいに、



仏の教えにそむく手伝いを弟子にさせるとは、けしからぬ僧です。
弟子はさっそく海辺の町へ行き、新鮮な鰯を八匹、手に入れました。
ただし、寺の者がおおっぱらにさかなを買うのはまずいので、あくまでもこっそりと買い求めたのです。

鰯は、誰かに外から見られないように、寺から持ってきた櫃（ものを入
れてしまっておく箱）に入れました。

さて、町からの帰り道。

弟子は、運の悪いことに、顔見知りの信徒三人組にばったり出くわして
しまったのです。

彼らは、道の先の方に弟子の姿を見つけたときには、

「ああれ、お久しぶりでございます。師のお坊さまのお具合は、その後、

